

受難第5主日礼拝 説教 「同じように」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年3月21日

創世記 25章 27～34節 マタイによる福音書 20章 20～28節

受難節を歩む私たちに、御言葉はこの日も一つの大事なことを語ります。それは、弟子として歩み続けることの難しさです。そこで、イエス様は弟子たちにこう語ります。「あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕えるものになり、一番上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人を身代金として自分の命を捧げるために来たのと同じように」と。そして、イエス様がこう語りかけるのは、子の行く末を案じる母親の次の一言があったからです。「王座におつきになる時、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れると仰ってください」とヤコブとヨハネの母親はこうイエス様に言ったのですが、この母親は、ものついでにこのようなことをイエス様に言ったのではありません。二人の息子を引き連れてイエス様の御前に進み出て、ひれ伏して懇願したというのです。それは、「自分の子だけは」との親心からでもあります。しかし、この密かな企みは他の弟子たちの知るところとなり、弟子たちの間で不興を買うことになりました。こうして、弟子たちの中に不穏な空気が漂い始めることになったのですが、そこで、イエス様が弟子たちを集め、伝えたことは、「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなた方の間では、そうであってはならない」ということでした。

そして、御言葉がこの日私たちに語るもう一つのこと、こうしたことが珍しいことではないということです。長子の権利を易々と売り渡したエサウと、兄エサウから長子の権利をかすめ取るように奪った弟ヤコブと、この兄弟同士の確執を御言葉は伝えるのですが、ユダヤ人である弟子たちにとっては、このことは初めて耳にすることではありません。これまで繰り返し何度も聞いてきた、彼らがよく知った出来事だからです。けれども、弟子たちの頭の中には、恐らくは、この遠い昔の物語はそれほど大きな位置を占めてはいなかったのでしょうか。もし、こ

の遠い昔の物語が、彼らの中で大きな位置を占めていたら、弟子たちの中でこのような諍いが起こりようはずもないからです。ですから、このそれぞれの御言葉を聞いているのは私たちだけ、ということになります。そこで、皆さんは、このそれぞれの御言葉から何を聞き取ったのでしょうか。

それぞれの御言葉を通し、先ず知らされることは、兄弟、仲間内での生存と勢力を巡る争いです。他を出し抜いてでも自分だけはいいポジションに着きたい、自分だけは救われたいというそんな卑しい思いが神の民の中にあり、しかも、イエス様の弟子たちの中にもあったということです。ですから、それをそのまま放置するわけには参りません。そのまま放置すれば、声の大きい力のある者と、そうでないものとの間に支配関係が生じることとなり、人と人が一緒に居ることは難しいことになるからです。ですから、イエス様が弟子たち全員を集めたのは、そんな弟子たちに一言釘を指そうとしたからでもあります。その上でイエス様が仰ったことが、イエス様と同じようになりなさいという、この「なる」ということでした。それは、共存ということをもイエス様がそれだけ重視していたからでもあります。ただ、これについては、エサウとヤコブの兄弟間の争いにも同様のことが言えます。つまり、人と人との共存こそが神様の願いだということです。なぜなら、修復しがたいこの兄弟間の溝は、やがて神との出会いを通して、共存の道筋が示されることになるからです。ですから、共存は神様の願いであり、それが神様の御心である以上、私たちが信仰を形に表す上で、この共存ということが一つの鍵になるのは間違いありません。しかし、それが難しい、それは誰もが知るところであると思います。

そこで、この共存と言うことですが、私たちににとっての共存とは一体いかなる意味を持つものなのでしょうか。人と調子を合わせ、上手に立ち振る舞うところで約束されているものなのでしょうか。あるいは、損得やものの考え方、生まれ

や育ち、あるいは、職業など、この世間的な立場、価値観などがぴったり一致することで得られるものなのではないでしょうか。皆さんも聞いたことがあると思いますが、教会は、仲良しクラブでもなければ、社交サロンのようなものではありません。神の家族、キリストを頭とするその体、それが主の教会であるからです。けれども、家族と言われている以上、御言葉が語るように、分かりやすい形での一致というものが常に絶えず約束されているわけではありません。従って、パウロが教会をキリストの体にとえるのは、上手くいくことを前提としてのことではなく、なかなか思うようには上手くいかないのが教会であるからです。そして、今日のそれぞれの御言葉がそのことを明らかにしてくれてもいるのですが、けれども、だから、争いごとは仕方ないということではありません。そこで、イエス様が仰ったことは、「皆に仕え、皆の僕になりなさい」ということではありますが、それは、僕のように人に仕えるということが、共存のための道筋として心に留めるべきものでもあるからです。つまり、イエス様に倣い、イエス様と同じようになるということが、私たちの信仰の肝であるということです。

それゆえ、このイエス様のお言葉は、私たちそれぞれの胸にしっかりと突き刺さっていることではないでしょうか。それは、私たちがこのことを繰り返し繰り返し聞いてきたからでもあります。ですから、ここでイエス様が仰りたいことは、私たちににとっては言わずと知れたことでもあるのでしよう。けれども、この繰り返し聞いてきた、分かっちゃいるけど、と言えらることを、私たちはまた今日もこうして聞いているわけではあります。そこで、皆さんは、この繰り返し聞いてきたという点をどのようにお考えでしょうか。もう十分に分かっているから大丈夫、そういうことでしょうか。それとも、分かっちゃいるんだけど、でも、そういうことでしょうか。つまり、もう十分、いやまだまだ、と、私たちの思いはそのいずれかに分かれるということでもあるのでしようが、では、もう十分、とはどういうことなのでしょう。自分はイエス様と同じようにしているし、そうできている、そういうことなのでしょう。けれども、どんな自信家でも自分がイエス様と同じだなどとはなかなか口にできることではありません。

そして、もちろん、そうではないわけで、つまり、ここに、私たちがこうして繰り返し御言葉に聞いていく理由があるということではあります。それゆえ、私たちは、イエス様の言葉を大事にしなければならないわけではあります。それにしても、どうして教会の中で争い事が起こるのでしようか。

エサウもヤコブも、そして、12人の弟子たちも、さらには、ヤコブとヨハネの母親も、この、分かっちゃいるけど止められない、という、この状態のままではあるとは思ってはいなかったはずではあります。まただから、この母親も、親心からイエス様にすがりつき、お願いをしたのでしよう。それは、年長者として、この分かっちゃいるけど、ということの危険性をよくよく知っていたからでもありました。ですから、この分かっちゃいるけど、ということとは、けしからんものであり、罰せられて然るべきだと言えらるのでしよう。しかし、それを単純にけしからん話で片付けてしまっているのかとも思っています。それは、母親というものはそういうものであり、母親らしさというものはこういうところに現れ出るものでもあるからではあります。ですから、親心というものは、まさに母親としてのその必然性がそうさせたということでもあるのですが、しかし、親馬鹿という言葉があるように、我が子のことしか眼に入らない、そうしたなりふり構わぬ姿をそのまま認めるのは難しいことでもあるのでしよう。けれども、放蕩息子のたとえ話にもあるように、イエス様は、それを親馬鹿と言って切り捨てることはなさいません。そして、それはここでもそうです。この母親らしさを親馬鹿と言って叱りつけるのではなく、そのままを受け止めているのがイエス様であるからではあります。そして、その上で、諸々のことを語っているのですが、このことはつまり、イエス様が、この母親の振るまいをみっともない、止めて欲しいと、そう単純に切り捨てていないということではあります。それゆえ、イエス様のそうした姿勢はこの母親だからということだけに限定されるべきではありません。エサウもそうですし、ヤコブもそうです。そして、ゼベダイの家族のことをなじる他の10人の弟子たちもそうです。なんだから言いながらも、結局は同じ穴の貉に過ぎないこれらの人々に対しても、イエス様は、単純な決めつけをしてはいない

わけで、それは、それが私たちの神様の御心でもあるからです。

ですから、このことは、こうして御言葉に聞いている者にとってはとても有り難いことです。そうした卑しきや浅ましさが自分にもあるということはよく分かっているからです。ただ、聖書は、この分かっちゃいるけど、ということの理由を私たちの罪の中に見出すのですが、それゆえ、聖書の御言葉を通して、私たちは、この罪の問題とこれまでずっと向き合ってきたのです。なのに、どうして、私たちはこの罪ときっぱりと縁を切ることができないのでしょうか。それは、この、子を思う母親の振るまいが示すように、私たちの罪は私たちらしきと深く関わっているからです。ですから、分かっちゃいるけど止められないのは、信仰が分かっている輩のすることだと、そう言い切ることは、それはそれで分かりやすい話であるのかも知れませんが、けれども、それが御心でないのは明らかです。なぜなら、そういう分かりやすい正論を吐くことは、神様がお認めになっている私たちらしさを奪うに等しく、それで、私たち罪人の成長が計られることはないからです。また、この正論を吐くかのような分かりやすさではありますが、それを口にするということは、結局は、一歩先を行きたい、人を出し抜いてでも自分は救われたいという、私たちのエゴ以外の何ものでもありません。なぜなら、人に対し、お前は分かっているといいきることは、分かっている人のことを力関係において下に置くことであり、つまりは、人を支配したいと思う歪んだ気持ちの現れでもあるからです。つまり、それこそ、イエス様が異邦人のやっていることと同じことをしているに過ぎないと仰っているとおりのことを自分もしているということです。

しかし、神様とイエス様が私たちについて単純な決めつけをしないというのは大変有り難い話ではあるのですが、けれども、だからそのままであっていいということではありません。そのままでは共存の道は開かれることはないからです。ですから、争い事には当然折り合いが付けられねばならないのですが、その答えが、僕のように人に仕えるということでもあるのです。ただ、このイエス様がご自分と同じようにと仰っている

味は、私たちもよーく分かっていることです。なぜなら、それは雲をつかむようなものではなく、私たち自身、自分にとって不可能なことではないことがよーく分かっているからです。それは、できる時もあるとできない時もあるからです。そして、それが、ここでイエス様と同じようにとされていることだと思いのです。ところが、私たちは、どうしてそれができたりできなかったりするのでしょうか。そのわけが私たちの罪の問題ということでもありますが、ただ、この私たちらしきと結びつく罪の問題を、単純にこうしよう、ああしようという話にしよう、結局は堂々巡りを繰り返すしかありません。ですから、いい悪い、けしからんという話でここでのことを理解しようとするなら、それでは、いつまで経っても共存の道が開かれることはないということです。

そこで、いい悪い、けしからんというところから考えるのではなく、このできることもあればできないこともあるというところから考えてみたいと思うのです。どうして、私たちは、イエス様が同じようにと仰ることを、できることもあればできないこともあるのでしょうか。それは、本来であれば、神様とイエス様の御心は私たちの中でどこまでも大きなものでなければならぬはずですが、ところが、それがどんどんどんどん小さくなってしまふことがある。つまり、私たちにとっての聖書の御言葉は、私たちの中で後退し、薄まってしまふことがあるということです。今日の御言葉が伝えることは、このあってはならないことがあったということです。それも、異邦人の中ではなく、私たちの中においてです。ですから、起こったことに対しては、それなりの対応をしっかりとしなければならぬのですが、対応するしない、できるできない、というところと言えば、誰よりも早く反応したのがこのヤコブとヨハネの母親でありました。このことはつまり、この母親が誰よりもイエス様のことをよく理解したということです。また、それだけではありません。ここでのことが、イエス様が弟子たちに十字架と復活の出来事を語った直後のことであつたことを思い出すと、弟子たちよりもこの母親の方がよっぽど飲み込みが早かつたということです。だから、「イエス様-」とすがりついたわけですが、それは、すがりつくこ

とで、分かっちゃいるけど、という、この自分ではどうすることもできないことができるようになり、そして、できることでより高い立場、より良い力を得ることができると思ったからです。

しかし、イエス様は、この親子に向かって、「あなたがたは、自分が何を願っているのか分かっていない」といって、彼らの真剣で真面目な思いを取り合おうとはしないのです。けれども、けんもほろろにということではありません。そこでイエス様が仰ったことが「このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができますか」と問い返してもいるからです。ですから、できるかできないかを問われたヤコブとヨハネは、大きな声で「できませぬ」と答えたのです。けれども、この彼らの覚悟の表れをイエス様は良しとはしなかった。それは、イエス様がここで一番言いたいことが、何かをするしない、できるできないということではないからです。最後のところで、「偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、皆の僕になりなさい。」と繰り返して仰っているように、イエス様が大事だと思っていることが、この「なる」ということであるからです。それは、この「なる」ということこそが、イエス様が同じようにと仰ることでもあるからです。

確かに、何かになる、変化する、成長するということは、できなかつたことができるようになることであり、したくなまじいことをするようになることでもあります。けれども、そのような変化が生じるのはどうしてなのでしょう。それは、努力の結果、精進の結果とも言えるのでしょうか。私たちが何かになる、事が成るとする場合の「なる」ということは、自分自身が主語ではないはず。「なみであり、つまりは、イエス様と神様が主語であるということです。つまり、ここで、イエス様が人に仕えるようになり、人の僕となると仰っていることは、自分が自分かと思う私たちに、私たちの命の導き手はどなたであるのかの気づきを与えたかからということです。そして、このことへの気づきであります。それは、気がついてああ良かったと思えることばかりではありません。それは、十字架を通り抜けるということでもあるからです。従って、気づきが与えられる

うことは、私たちが傷だらけになるということ。それは、神様とイエス様のいますところに、私たちもまた共にいるからです。だから、私たちは、傷を負いながら、あるいは、負った傷を互いに労り合いながら、イエス様と共に共存の道を辿ることになるのです。そして、それがここでイエス様が仰る、イエス様と同じように「なる」ことなのです。つまり、この「なる」ということは、イエス様と神様のいますところに私たち自身がいるから約束されるものであり、つまりは、「いる」ことが、イエス様が「同じように」と言われること的前提であり、だから、私たちは変えられ、成長させられることになるのです。そして、先週、それが、事実、その通りだということ、教会の牧師として改めて思わされたのですが、それは、先週行われた幼稚園の卒園式、終園式のことです。子どもたちのこの一年の成長を強く実感させられたからでもあります。その子供たちの姿を見て、「いる」ことが「なる」ことに繋がることを強く実感させられたのです。そして、それが許されたのは、保護者の皆さんと職員たちの適切な関わりがあったからです。

教会はキリストを頭とする体です。このことはつまり、イエス様の適切な関与がそこにいるすべての人に与えられているということです。そして、それは、型にはめるようなものではありません。イエス様と同じように「なる」ということであり、つまりは、「イエス様と同じように」と言われていることは、私たちが私たちにらしくある中で約束されているのだということです。ですから、このイエス様と同じようにあること、イエス様らしくあることは、私たちにとっては強いられたものでなく、必然性を伴うものであり、つまり、この世の何物にも拘束されない、幼稚園の子供たちがまさにそうであるように、自由が約束されているがゆえのものであるということです。幼稚園の子供たちの姿は、まさにそのことを私たちに伝えてくれているものであり、そして、この私たちにらしくあることが私たちに許されている、それが私たちに藤沢教会であるということです。ですから、ここに「いる」こと、「ある」ことに信頼し、新しい歩みを始めて参りたいと思います。祈りましょう。